# 平成28年度　開智中学校（国語）　解答・解説

## 解答

一

① 部分　② 先祖　③ 理性　④ 供給　⑤ 例外　⑥ 到着　⑦ 病弱　⑧ 相対
⑨ 具体　⑩ 公開

二

問一　a 方位　b 困難　c 天災　d 資格　e 志
問二　A 右　B 左
問三　ア
問四　ウ
問五　問題意識
問六　問題意識などにこだわらず、生きる喜びを持った魅力のあるキャラクターが出てきて、いろんなかたちで受け取めてもらえる、面白くて懐の深い作品。
問七　Ⅰ プラン　Ⅱ どこへ行くかわからない
問八　ア・イ・エ

三

問一　オ
問二　定
問三　娘のピアノがいつまでも上達しないので、先生に補習をしてもらわなければならなくなったから。
問四　エ
問五　イ
問六　本番になれば
問七　Ⅰ 先生が「私」に余計な補習をした　Ⅱ 結局みどりちゃんの失敗で恥をかく

## 解説

二

問六　宮崎監督は、「ぼくらの若いころは、問題意識を持っていない作品などは最低だ、文学として出来上がっていなくても問題意識がある方が意味があるんだ、と思っていたんですが、やはりちがいますね」と言って、「黒い龍と白い龍」の例を話しだしています。そして「生きる喜び」とかがないものよりも、「魅力のあるキャラクター」が出てきて、「いろんなかたちで受け取られるような懐の深いものをつくらないと」「面白くもなんともないだろう」と主張しています。

三

問三　お母さんは「いつまでたってもちっとも上達しない私に、先生はあきれかえりながら、最終手段として『補習』という、思いもかけなかったとんでもない隠し技を提示してきた」ことに、「申し訳ない、はずかしい」と頭を下げています。

問七　「私」は、先生が自分に補習をしてくれたのは「私のためじゃない。本番で先生が恥をかかないため」だと思っています。そのことにやきもちをやいたみどりちゃんのほうが本番でミスをしてしまい、結局先生は「私」ではなくみどりちゃんの失敗で恥をかくことになってしまったので、「私」への補習は「余計なことだった」と感じています。